

大 祓 詞

高天原に神留り坐す 皇親神漏岐 神漏美の命以ちて 八百萬神等を神集へ

に集へ賜ひ 神議りに議り賜ひて 我が皇御孫命は豊葦原瑞穗國を 安國と

平けく知ろし食せと 事依さし奉りき 此く依さし奉りし國中に 荒振る

神等をば 神問はしに問はし賜ひ 神掃ひに掃ひ賜ひて 語問ひし 磐根

樹根立 草の片葉をも語止めて 天の磐座放ち 天の八重雲を伊頭の千別き

に千別きて 天降し依さし奉りき 此く依さし奉りし四方の國中と

大倭日高見國を安國と定め奉りて 下つ磐根に宮柱太敷き立て 高天原に

千木高知りて 皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて 天の御蔭 日の御蔭と隠り

坐して 安國と平けく知ろし食さむ國中に 成り出でむ天の益人等が 過ち

犯しけむ種種の罪事は 天つ罪 國つ罪 許許太久の罪出でむ 此く出で

ば 天つ宮事以ちて 天つ金木を本打ち切り 末打ち断ちて 千座の置座に置

き足らはして 天つ菅蔭を本刈り断ち 末刈り切りて 八針に取り辟きて

天つ祝詞の太祝詞事を宣れ 此く宣らば 天つ神は天の磐門を押し披きて 天の八重雲を伊頭の千別きに

千別きて 聞こし食さむ 國つ神は高山の末 短山の末に上り坐して 高山

の伊褒理 短山の伊褒理を搔き別けて聞こし食さむ 此く聞こし食してば

罪と云ふ罪は在らじと 科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く 朝の

御霧 夕の御霧を 朝風 夕風の吹き拂ふ事の如く 大津邊に居る大船を

舳解き放ち 艫解き放ちて 大海原に押し放つ事の如く 彼方の繁木が本を

焼鎌の敏鎌以ちて 打ち掃ふ事の如く 遺る罪は在らじと 祓へ給ひ清め給

ふ事を 高山の末 短山の末より 佐久那太理に落ち多岐つ 速川の瀬に坐す

瀬織津比賣と云ふ神 大海原に持ち出でなむ 此く持ち出で往なば 荒潮の潮

の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比賣と云ふ神 持ち加加呑みて

む 此く加加呑みてば 氣吹戸に坐す氣吹戸主と云ふ神 根國 底國に氣吹

き放ちてむ 此く氣吹き放ちてば 根國 底國に坐す速佐須良比賣と云ふ

神 持ち佐須良ひ失ひてむ 此く佐須良ひ失ひてば 罪と云ふ罪は在らじ

と 祓へ給ひ清め給ふ事を 天つ神 國つ神 八百萬神等共に 聞こし食せ

と白す